

熊大病院ニュース

第18号

Kumamoto University Hospital

熊本大学医学部附属病院 広報誌



特集1..... P1～P2

満屋裕明教授
(血液内科・膠原病内科)
「朝日賞」「読売国際
協力賞」を受賞

イベント紹介 P2

知っ得! 納得! Q&A P3

「熊本県発達障がい
医療センター」って何?

特集2..... P4

がんナビゲーター
認定制度が発足しました

診療科・部門紹介 P5

*乳腺・内分泌外科
*地域医療連携センター

看護部だより P6

**中央処置室、外来化学
療法センターのご紹介**

総合案内 裏表紙

熊本大学医学部附属病院

- 【理念】** 本院は、患者本位の医療の実践、医学の発展及び医療人の育成に努め、地域の福祉と健康に貢献する。
- 【基本方針】**
- ・患者の希望、期待、要求を尊重する医療の実践
 - ・安全安心で質の高い医療サービスの提供
 - ・優れた医療人の育成
 - ・先進医療の開発と推進
- 【患者の権利】**
- ・良質な医療を受ける権利
 - ・十分な説明と情報提供を受ける権利
 - ・自分の意思で医療を選ぶ権利
 - ・プライバシーや個人情報が保護される権利
- 【患者の責務】**
- ・自分の健康状態について正確に伝える
 - ・本院の規則を遵守する
 - ・迷惑行為を行わない



病院敷地内**全面禁煙**のお知らせ

皆様のご理解とご協力をお願いします。

熊本大学医学部附属病院の建物内、敷地内（含む中庭、駐車場）および病院周辺の道路は全面禁煙です。喫煙を確認した場合は、来院者には退去勧告、入院患者さまには退院や転院を勧告いたします。禁煙へのご理解とご協力をお願いいたします。

看護師募集中

最先端の医療に携わってませんか?

育児休業復帰
支援プログラム
実施中です!

担当:熊大病院 総務・人事ユニット 人事給与担当

☎ 096-373-5913





満屋裕明教授（血液内科・膠原病内科） 「朝日賞」「読売国際協力賞」を受賞

【監修】 熊本大学医学部附属病院 血液内科・膠原病内科 満屋裕明 教授

本院血液内科・膠原病内科の満屋裕明教授が、2014年度「朝日賞」および「読売国際協力賞」を受賞しました。

満屋教授は1985年に世界初のエイズ治療薬「AZT（アジトチミジン）」を開発し、その後副作用が少ない「ddI（ジダノシン）」、「ddC（ザルシタピン）」と、相次いでエイズ病原ウイルスであるHIVの逆転写酵素の働きを止める治療薬を開発しました。また、HIVの成熟に関わる酵素の働きを止める薬（プロテアーゼ阻害剤）の開発にも取り組み、2006年、米国の科学者と共同研究で開発した「ダルナビル」は、発展途上国が特許料を払わずに使える医薬品として世界で初めて国連機関に登録されました。

上記のようなエイズ治療薬の開発を通じ、発展途上国の貧しい感染者も治療を受けられるよう、長きにわたり尽力してきたことが評価され、受賞に至りました。



【1】1月28日に東京・帝国ホテルにて開かれた2014年度 朝日賞の贈呈式。



【2】朝日賞牌のブロンズ像。

Message

エイズウイルス(HIV)は、1983年にフランスの研究機関の研究者たちによって発見されました。ウイルス発見当時は、感染経路も不明であり、発症した多くの若者や働き盛りが突然免疫機能を失い、体中を細菌やウイルスに蝕まれる。肺炎やがん、脳症に陥り、2年以内に9割近くが死亡するため「死に至る病」とも言われていました。

現在では25種類の治療薬が承認され、早期に治療を開始できれば、薬を飲みながら普通に仕事をし、子供を育てることが可能となりました。

薬によってエイズウイルスが体内から消えるわけではないため、一生薬を飲み続ける必要こそありますが、「死に至る病」から「慢性疾患」へと発症者を取り巻く環境は進化しています。

エイズ治療薬の研究開始から30年という月日経りました。「安くて、副作用がなくて、1週間に1回飲めばいい薬。」そんな薬を目標に、これからもエイズ治療薬の研究を続けていきたいと思えます。

みつや・ひろあき 1950年 長崎県生まれ。1975年 熊本大学医学部卒。現在、熊本大学医学部内科学 血液膠原病内科主任教授（治験支援センター長、感染免疫診療部長併任）及び国立国際医療研究センター理事・臨床研究センター長、米国立がん研究所レトロウイルス感染症部長などを兼任。紫綬褒章、慶應医学賞など受賞多数。

朝日賞 1929年に、朝日新聞創刊50周年を記念して創設されたもので、人文や自然科学など、日本のさまざまな分野において傑出した業績をあげ、文化、社会の発展、向上に多大な貢献をした個人または団体に贈呈される。

読売国際協力賞 1993年に、読売新聞創刊120周年を記念して創設されたもので、国際協力・貢献に進んで身を投じ、国際協力活動の分野で顕著な功績のある個人や団体に贈呈される。

イベント紹介

一般財団法人 恵和会の助成により開催されている院内のイベント等を紹介しします



日本フィル弦楽四重奏が 外来コンサートを開催

2014年11月27日、本院外来診療棟1階ロビーにて、日本フィル弦楽四重奏団によるコンサートが開催されました。モーツァルトの弦楽四重奏曲やオペラ座の怪人、アナと雪の女王など幅広いジャンルの音楽が会場に響きました。

ハロウィンイベントを 小児病棟にて開催

2014年10月31日、西・東病棟8階で毎年恒例のハロウィンイベントが開催されました。集まった子供たちのもとに谷原病院長が登場し、ハロウィンの由来のお話をした後に、お菓子をプレゼント。子供達は笑顔で受け取りました。





「熊本県発達障がい医療センター」って何?

平成26年4月より、熊本大学医学部附属病院 神経精神科にて、熊本県発達障がい医療センター事業を開始しました。専門の医師と精神保健福祉士が勤務しており、ユニークな試みとして注目されています。センターの機能や役割について、簡単にご紹介したいと思います。

ADHD
注意欠如
多動性障害

自閉症
スペクトラム

LD
学習障害



発達障がいは、生まれつきの脳のタイプであり、育て方やしつけの問題ではありません。

『発達障がい』とは どんな障がいですか?

発達の仕事は様々ですが、発達の偏りによって生きづらさを抱える場合があります。特有の発達の特性によって生じる困難を発達障害といいます。自閉症スペクトラム、多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)などが含まれ、社会的コミュニケーション、想像性、注意力、読み書きなどの領域に困難がみられます。治療を要する病気とは性質が異なりますが、正しく理解し、困難を解消していくスキルを身につけていくことで成長し、社会生活を適切に送っていくことはできます。子どもだけの問題ではなく成人して気づかれる場合もあります。

発達障がい医療センターの 役割は何ですか?

発達障がいに関する医療の質を向上させることが、熊本県発達障がい医療センターの役割です。当センターが掲げる3つの柱として、①発達障がいに関わる医療者の育成、②地域への専門的医療支援、③社会への啓発や地域連携をあげています。このうち②の地域への専門的医療支援に関しては、平成26年10月より人吉医療センターに発達専門外来を開設し、当センターの医師が診療を開始しました。今後は、地域での症例検討会や、医療者育成のためのプログラム作成などについて検討していく予定です。

相談したい時には どうしたらいいですか?

熊本県発達障がい医療センターホームページ(※1)「相談窓口のご案内」にて、相談先をご紹介します。また、本院外来診療棟4階Mブロック神経精神科でも、子ども外来として診療を行っております。ご質問・ご相談等は、外来予約センター(☎096-373-5973)にお問い合わせください。通常の流れとしては、当センターの精神保健福祉士がお話を伺い、受診が必要と判断された場合は、日程調整をおこなった後に、診察→検査→結果説明→治療開始となります。

【※1】<http://www.kumamoto-hattatsu.jp>

がんナビゲーター 認定制度が 発足しました。



教育セミナー



相談場面のデモンストレーション

日本のがん医療の発展と進歩を促進し、国民の福祉に貢献することを目的として、一般社団法人日本癌治療学会が平成26年から開始した「がん医療ネットワークナビゲーター（がんナビゲーター）」の育成についてご紹介します。

【監修】一般社団法人日本癌治療学会 がん診療連携委員会委員長 片瀬秀隆 教授

がん相談支援業務の現状

がん患者様の困窮の3大要因は、医療情報の不足、高額医療費の支払い、精神的な寄り添いの不足に集約されます。このため、がん医療情報の提供は、患者様・ご家族に対するがん相談支援としてがん対策の大きな柱の一つに位置付けられています。本院をはじめ二次医療圏をカバーするがん診療連携拠点病院では、がん相談支援センターの設置が義務づけられ、センターに所属する相談員が活躍しています。しかし、人員が絶対的に寡少であるなどその活動の展開には限界が感じられます。そこで、拠点病院のがん相談支援業務を補完し「つなぐ」役割を担うがんナビゲーター認定制度が発足しました。

熊本圏域 がん診療連携拠点病院

熊本大学医学部附属病院、熊本市市民病院、熊本赤十字病院、熊本医療センター、済生会熊本病院、熊本中央病院、熊本地域医療センター、くまもと森都総合病院、高野病院

宇城・天草圏域 がん診療連携拠点病院

熊本南病院、天草地域医療センター、天草中央総合病院

八代・芦北・球磨圏域 がん診療連携拠点病院

熊本労災病院、熊本総合病院、水俣市立総合医療センター、人吉医療センター

有明・鹿本・菊池圏域 がん診療連携拠点病院

荒尾市民病院、熊本再春荘病院、山鹿市民医療センター

※熊本県には19のがん診療連携拠点病院があり、がん相談支援センターを設置しています。お気軽にご相談ください。

地域のがん診療ネットワークに 属している人が有資格者です。

がんナビゲーターとは、がん情報の提供のみに特化した人材で、医療実務には係わりません。すなわち、がんに関する正確な情報を的確・適切に患者様・ご家族にお伝えし、疑問にお答えして悩みを解決する手助けのできる民間のがん相談支援員です。がんナビゲーターは必ずしも医療者資格を要せず、ピアサポーターや福祉・介護職などを含め、その地域のがん診療ネットワークに属している方が有資格者で、所定の履修により資格が付与されます。最終的な認定がんナビゲーターの人数は、がん治療認定医と同じ2万人を目標としています。

ナビゲーター誕生へ向けて モデル事業を開始！

この制度の最初として、昨秋から全国3地域（熊本・福岡・群馬）でモデル事業を開始しました。平成26年12月7日に熊本市で開催された教育セミナーには334人の参加があり、今後さらに研修の場を提供し、平成28年度には地域に根ざした相談員となるナビゲーターが誕生する予定です。

本制度に関する お問い合わせ先

一般社団法人 日本癌治療学会東京事務所

☎ 03-5542-0546 FAX 03-5542-0547
E-mail navi@jsco.or.jp

乳腺・内分泌外科



▲岩瀬弘敬教授

当分野は乳癌の集学的治療、甲状腺・副甲状腺疾患の外科的治療を担当しています。乳癌手術では、術前に薬物療法で腫瘍を縮小させて縮小手術を行うこと、センチネル(見張り)リンパ節生検の結果から腋窩リンパ節郭清を

省略することなど、患者様に優しい手術を心がけています。乳房切除術が避けられない場合にも、形成外科の協力で自己組織やインプラントを用いた乳房再建術なども積極的に取り入れています。薬物療法では、国内外の治験や臨床試験に積極的に参加し、新薬剤や治療法の開発、予後因子や効果予測因子そしてバイオマーカーなどのトランスレーショナル研究に関わっています。特に、進行乳癌に対するホルモン療法や遺伝乳癌に対する診療研究は高いレベルにあると言えます。また、腫瘍の性質や患者様の個性に合わせた個別化診療を目指して、病理部、他診療科医師、薬剤師、看護師、ソーシャルワーカー、医療事務と共にチーム医療を実践しています。

地域医療連携センター



▲片瀬秀隆 センター長

▲宇宿功市郎 副センター長

▲稗田君子 看護師長

外来診療棟1階 総合受付の右側(10番窓口横)に、プライバシーに配慮した相談室を設けています。お気軽にご相談ください。

本院は特定機能病院・急性期病院として高度先進医療を提供する役割が求められています。そのことから、本院での治療が終わると、患者様は次の病院への転院、あるいは在宅で

の療養を目指すこととなります。在院日数は年々短くなる傾向にあり、治療は入院から外来へ移行し、日常生活を送りながら治療や定期受診を継続する患者様が増加しています。そのような中、地域医療連携センターは、地域の医療機関との連携を担う部署として、病気によって生じるいろいろな悩みや不安についてのご相談に対処することを主な仕事として活動しています。患者様やご家族の思いをお聞きしながら一緒に考えることに努め、担当医師や看護師、薬剤師、栄養士、あるいは理学療法士などの方々との話し合いも行います。また、地域でのサポート、例えば訪問診療や訪問看護、ヘルパーが必要な場合、患者様・ご家族にご参加いただいで一緒に話し合います。

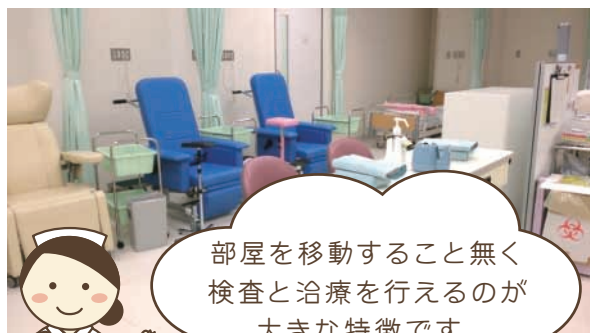


中央処置室、外来化学療法センターのご紹介

大学病院における外来診療の役割は、患者様のニーズはもとより在院日数の短縮、在宅医療の充実などにより益々大きくなっています。昨年9月に新外来診療棟がオープンし快適な環境で安全・安心な医療・看護の提供を目標にスタッフ一同努力しております。今回、新外来診療棟2階の中央処置室と外来化学療法センターをご紹介します。

中央処置室設置に伴う医療行為及び看護ケアの集約化は、円滑な診療に繋がっています。各診療科の医師や看護師間の連携強化を図り、患者様やご家族が安心して安全な治療を受けることができるよう日々関わっています。

中央処置室



部屋を移動すること無く検査と治療を行えるのが大きな特徴です。

中央処置室は新外来診療棟移転に伴い新設され、各診療科より依頼のある検査(採血、検尿、負荷試験、各種穿刺)、治療(輸血・点滴・注射等)や自己注射指導などの在宅療養支援、体調不良時の看護ケア等を行っています。1日に約40~50名の患者様が来室、対応延べ件数は100件前後に上ります。室内は電動ベッド13台、リクライニングチェア3台、個室1室を完備し、内容に応じて使い分ける事で快適に過ごしていただけるよう配慮しています。

外来化学療法センター



外来化学療法センターは、本院が都道府県がん診療連携拠点病院に指定された2006年に5床で開設され、開設初年度の利用者数は年間1,284名でした。その後は利用者数が毎年増加し、2009年に10床へ増床、昨年度の年間利用者は4,962名まで増えました。新外来診療棟移転に伴い18床に増床しております。移転前は患者様の待ち時間が大きな課題でしたが、増床によって待ち時間をかなり短縮することができました。また、中央処置室、緩和ケアセンターと隣接した位置にあるため連携がとりやすく、各部署と協力してケアを実践しております。

今後も患者様に快適な環境で安心して治療を受けていただけるよう、さらに取り組んでいきたいと思っております。

